

2016.5

(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

とみや 薬  
富 薬

5号

第38巻  
No.322



シナマオウ *Ephedra sinica* Stapf (マオウ科 *Ephedraceae*)

**生薬** マオウ（麻黄） 秋に地上部を刈り取り、陽乾する。

**成分** アルカロイド：ephedrine, pseudoephedrine, ephedroxane, norephedrine, methylephedrine 等、タンニン、フラボノイド等。

**効能** 主に漢方処方用薬。鎮咳去痰、気管支拡張、鼻炎、解熱鎮痛消炎薬とみなされる葛根湯、小青竜湯、防風通聖散、麻黄湯、麻杏薤甘湯などに配合される。



生薬 シナマオウ

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



マオウ科は裸子植物門、グネトウム目に属するマオウ属一属からなる単型科です。地中海沿岸から中国西北部、北アメリカ西部、南アメリカ西部から南部の地域に約35種が分布し、やや冷涼で乾燥した岩石の多い所を好んで生育することから、ギリシア語の *epi* (上) と *hedra* (座) より「石の上に生ずる」属名が付けられたといわれています。昔より薬として利用していたようで、インドの最も古いサンスクリットの経典『Rigveda』(リグヴェーダ B. C. 12世紀頃) の中に勇気と長寿と知恵を受ける神聖な飲み物「Soma」があり、*Ephedra* spp. が用いられていたという説があります。ディオスコリデスの『薬物誌』(1世紀頃) に「Tragos」の名で記載されていますし、

アメリカ西南部からメキシコにかけて自生する *E. antisiphilitica* をアメリカインディアンは強壯、興奮薬や梅毒の予防薬として用いていました。

最も古くから使い、現在も使っているのは中国とその文化圏であろうと推測されます。『神農本草経』に「一名龍沙。味苦温。川谷に生ず。中風、傷寒、頭痛、湿瘡には表を發し汗を出すを主どる。邪熱の気を去り、欬逆上気を止め、寒熱を除き、癥堅、積聚を破る。」と記されています。『名医別録』(502-536) に「晋地、および河東に生ずる。立秋に茎を採り、陰乾して青くする。」と記され、蘇頌(1020-1101) は「今は汴京の付近に多くあるが、中牟のものが勝れている。春苗が生え、夏五月になれば長さ一尺ほどになり、梢上に黄花が咲き、実を結ぶ。実は百合瓣のようで小さく、また皂莢子に似たものだ。味は甜く、微し麻黄の気があり、外皮が紅く、裏に仁がある。子は黒く、根は紫赤色だ。俗説にこの物には雌、雄の二種あって、雌は三月、四月の内に花を開き、六月子を結ぶ。雄は花がなく、子を結ばないという。立秋になって茎を採取して陰乾する。」と自生地、植物の説明、採取法について詳しく説明しています。李時珍(1518-1593) は名の由来について「その味が麻し、その色が黄なるを表したのだというが、果して然りや否やは審らかでない。」と言っています。

国内には自生しない植物ですので、『本草和名』(918) や『和名抄』(931-937) には、中国本草書に出ている名と「和名、加都祢久佐(かつねくさ)。一名、阿末奈(あまな)。」などトクサ属(*Equisetum* L.) 植物と思われるの和名が取り上げられています。『和漢三才図会』(1713) でも同様の扱いになっており、説明文と図は『本草綱目』(1590) より写し取ったと思われ、どのような植物であったかは把握していなかったと思われます。『物類品彙』(1763) にいたっては「和名イヌトクサ(*Equisetum hiemale* L.) 又カハラトクサ(?) 云所在、水湿の地に産す。形木賊に似て稍小なり、又賣(スギナ) に似たり。…和産を用うべし。」とトクサ属植物を当てています。『本草綱目啓蒙』(1803) になって初めて「海浜砂地に一根叢生す。形、木賊に似ていたって細く、中の孔はなほだ小にして、実するか如しにて黄色なり。葉なく、茎のみにして節あり。節ごとに寸許下節に枝をわかす。舶来の中に稀に花の著たるも、実の著たるもあり。その実の形蘇頌の説の如し。…今市人、イヌトクサを以て真の麻黄とす。然れどもこの草は実を結ばず。故に麻黄に非ず。」と実を結ばないシダの類のイヌトクサとは違うものであると言っています。幕府の薬園である小石川御薬園の『御預御薬草木書付控』に「享保十二年(1727) 未年中(朝鮮より宗対馬守献上) 麻黄 二根」とあり、中国産の麻黄が朝鮮から渡来し、植栽されたことが記されています。これによって正しい麻黄の形態が分かったのではと推測されます。(村上守一 記)